【2026 ワールドカップ・ソフィア大会（1 日目)】

開催日：2026 年 3 月 28 日～30 日
開催地：ブルガリア・ソフィア

今大会には、個人 69 名、団体 26 チームが出場し、53 か国が参加する。さらに、国際体操連盟新体操技術委員（TC）メンバーも全員が現地に集結し、世界選手権に匹敵する非常にレベルの高い大会となっている。

今年から AIN としてロシアおよびベラルーシの選手が参戦し、オリンピック種目としての位置づけ、さらに出場枠獲得にも関わる重要な大会であることから、会場は昨年以上に一層の緊張感に包まれている。

日本からは、ワールドカップシリーズにナショナル個人選手を各大会へ派遣し、国際大会においてどのような評価を得られるかを分析するとともに、その結果を今後の強化へとつなげ、来年のオリンピック出場枠獲得に向けた取り組みに生かしていく方針である。

本大会には、フェアリージャパン団体と、個人は喜田未来乃選手が出場する。

なお、次期オリンピック（ロサンゼルス大会）に向けた選考システムについては、前回大会から一部変更があり、ワールドカップシリーズ（2026–2027）のランキングがオリンピック出場枠獲得に直結する重要な位置づけとなった。
本シリーズは全 8 大会で構成され、最低 4 大会への出場が必要となり、そのうち上位 4 大会の成績によりランキングが決定される。

個人においてはランキング上位 2 名に出場枠が付与される（各国 1 枠)。団体においてはランキング上位 1 か国に出場枠が付与される。

そのため、各国がランキング獲得を目的に積極的に参戦しており、今大会も多くの国が参加する競争の激しい大会となっている。

【個人：喜田未来乃】
●個人総合
《1 種目目：リボン》
得点：25.350（DB 6.10／DA 4.20／A 7.65／E 7.45／P 0.05）

序盤から落ち着いて演技に入り、丁寧に一つひとつの技に向き合う姿勢が見られた。可動域の広がりや身体の使い方においては確実な成長が感じられ、作品としての表現の幅も広がってきている。

一方で、最初の R における回転の精度や、ラファエリターンでの踵のコントロール、終盤の前転シリーズなど、細部の精度において今後さらに高めていきたいポイントが見られた。パンシェにおいても、動きの大きさが出てきた分、それを安定して支える筋力の強化により、より完成度の高い演技へとつながることが期待される。
また、丁寧に演技を進める中で、リボンの描きにやや緩さが見られ、後半にかけて表現の力強さにおいて改善の余地が感じられた。今後は、手具操作の質をさらに高めることで、演技全体の印象をより強く打ち出していきたい。

全体としては、身体能力の向上が演技の質に反映され始めており、今後の積み上げによってさらに安定感と完成度が高まる内容であった。

《2 種目目：クラブ》
得点：26.150（DB 7.00／DA 3.30／A 7.75／E 8.10）
新しい作品での試技となったが、演技全体を通して非常に丁寧に実施することができ、E 得点においても 8.0 を超える評価を得るなど、確かな手応えを感じる内容となった。

演技前はやや緊張した様子も見られたが、ウォーミングアップを重ねる中で身体の軸が整い、良い緊張感の中でフロアに立つことができていた。演技が進むにつれて動きの安定感も増し、後半に向けて質の高い実施へとつなげることができた点は大きな収穫である。
ミスなく演技をまとめ、安定した実施につなげることができた一方で、R での視野外キャッチやラファエリターン、パンシェバランス、フェッテターンなどにおいては、さらなる精度向上の余地が見られた。また、全体的に DA の完成度においては、構成としての説得力を高めていくことで、得点をより引き出していくことが期待される。

今後は、各要素の質とつながりをさらに洗練させ、構成全体としての完成度と存在感を高めていくことで、より高い評価につながる内容であった。

【団体】
●団体総合
《1 種目目：ボール 5》　9 位

得点：24.30（DB 4.50／DA 6.10／A 7.40／E 6.30）

本大会は新チームとして初めての国際大会出場となった。日本での事前練習および公式練習では、落ち着いて演技を行うことができ、全体として安定感の向上が見られていた。本番に向けてはやや緊張感の高まりも見受けられたが、国際大会特有の雰囲気を経験する貴重な機会となった。

演技においては、冒頭の 3 つの CR を確実に実施するなど、序盤は落ち着いた立ち上がりを見せた。一方で、その後の交換において受けの価値を十分に取りきれない場面が見られ、結果として DA で 3 箇所、DB で 3 箇所の価値の取りこぼしがあった。いずれも 0.2 点と小さな差ではあるが、積み重なることで得点に影響を与える結果となった。
また、中盤の CR における背面受けや終盤の交換において落下が見られたが、いずれもタイミングや距離感といった連携の精度を高めることで改善が見込まれる内容であり、今後の伸びしろとして明確に捉えることができる。結果として決勝進出には 0.2 点届かなかったものの、僅差での争いの中で戦えたことは大きな収穫である。
芸術面においては、明確なテーマ性と構成が評価され、作品としての方向性は確立されつつある。一方で、D スコアにおいては構成面からさらに加点を狙う余地があり、今後のブラッシュアップにより得点向上が期待される。また、DB の採点においては精度の要求が高まっており、特にフェッテバランス中の動足のコントロールなど、細部の質を高めることが重要となる。

全体として、新チームとしての土台は着実に構築されており、国際舞台での経験を通して課題と可能性の双方が明確になった大会であった。今後、技術面・構成面の精度を高めていくことで、より完成度の高い演技へと発展していくことが期待される。

〈出場選手〉
田口久乃
西本愛実
花村夏実
田中友菜
眞鍋凜

【ライブリザルト】
SEIKO SPORTSLINK
https://seikosportslink.com/gygr/206/?i=20010081&l=en